

天売島に引揚げてきた。その便りによると、父は、昭和二十二年十月三十一日に、本斗町で病死したのでだびにふし、遺骨の一部と遺品を少し持ち帰ったとのこと。そして、天売島には親戚や知人が多いので、ここで葬儀をするから、すぐ出てくるようにという内容のものであった。

これより先に引揚げてきた父の知人の話によると、「間もなく引揚げることができると思うが、引揚げ後は虻田町の同社工場に勤務することに決まっているから、それまで頑張るように」とのことであり、それを唯一の支えに今日まで頑張ってきたので、一瞬目の前が真暗になり、虚脱感に襲われた。

親戚などの援助により、父の葬儀も無事に終り、上司や周囲の方々にはげまされ、気持をとりなおして職務に精励した。

昭和二十五年十月に母は、妹を連れて再婚したので、姉の家に同居したが、その姉も馴れない厳しい農作業など、急激な生活環境の変化に順応することができず、体調をくずして看病のいかなく昭和二十六年八月に死亡し

たので、私は役場の独身寮にはいった。寮にはいったものの安い給料では食費を払うと小遣いが出ないありさまであったので、自炊をした。幸い母の再婚先は農家であったので、たまには米や野菜を差し入れてくれたり、天売島の叔父は魚を送ってくれたので助かった。

昭和三十年九月には妻をめとることができ、自分の家に住み、今では子供二人は成人し、平和で安定した生活を営んでいるが、これも苦しい時代に職場の上司、同僚、周囲の方々の物心両面にわたる援助があったからであり、感謝の気持ちは永久に忘れてはならないと思っている。

戦後の父母を偲んで

北海道 佐々木 千恵子

私が終戦を迎えたのは、小学五年生で「日本が負けたんですよ」と言う先生と何だかわからないが皆で大声を張り上げ泣いたのを今でも覚えております。

その直後引揚命令で病弱の父を残し当時白浦の鉄道学校へ行っていた兄とも連絡とれず母は泣き泣き私達幼子五人を連れて落合を立ちました。丁度その頃防空壕内で「ハシカ」が流行していて末の弟もかかってしまいました。

母は出来るだけの荷物を背負うため私が弟を背負い八月真夏の暑い日、豊原まで行きそこで足止めされ小学校へ収容されました。子供心にも必死でした。終戦になっているのにソ連の攻撃が続き何度も学校の防空壕に隠れたものでした。やがて落合に帰るようになり帰ってみると、あちこち爆弾がおちたことで父が逃げるとき「もう駄目」とさえ思ったことなど聞かされた。ともあれ、家族全員がやっと揃ったその幸せも束の間、病弱な父は空襲でショックが大きかったのか、それとも医薬品もなく十分な治療が出来なかったのか、一月の寒い日急死しました。

ソ連軍も進駐して治安も悪く母子家庭ですから不安なのでソ連のパン工場主任一家に一室を貸した。二十一年の十二月に再度引揚命令が来て厳寒の真岡で何日も収容

され船を待ちました。一月四日、ついに白龍丸に乗り函館へ向かうことが出来ました。

父の一周忌は船の中で何も出来ず母はくやんでいました。四国へ引揚げる予定でしたが炭鉱が景気がいいと聞き叔父を頼って夕張へ行くことになりました。その叔父もその年事故で亡くなってしまいました。

母は十七歳を頭に六人の子供を抱え引揚げて来てからの方が大変だったと思いました。

住宅、食糧事情も悪く環境も変わり知らない土地でどんなにか苦しい日々だったでしょうか。母は何でもして働きました。

私は女学校も新制中学と制度が変わり、豊原師範に行く夢も、父が医者になれと言った夢も破れ、消え去ってしまいました。

私は母を少しでも助けようと思い看護婦となり現在も続けています。

この時代はどんな人も大変だったと思いますが「戦争引揚」ということがなければ私達の運命も大きく変わっていたことでしょう。

医療の進んだ今日、長寿国日本の現在父を思い出し悔やまれて仕方ありません。母は八十歳でこの世を去りました。

引揚者はたくさんの財産を失いましたが子供だけは何よりの財産と思い一生懸命になって育ててくれた母に心からの感謝と本当に御苦労様でしたと言ひ、永のお別れをしたのです。

最近日ソ友好も盛んになって来ましたので是非折をみて父が亡くなった地であり、私達が生まれ育ったあのなつかしい山や川を今一度この目で見たいと思つています。

敗戦体験と引揚後の労苦

北海道 山本フジ

夢にも思つていなかった敗戦に直面、とても信じられなく、昭和二十年八月下旬にソ連戦車隊三十台近くがごう音とともに私の目前を通り過ぎて行き恐ろしい思いを

しました。

二十年八月十五日には豆を打つ音がはげしく、豊原駅において日本人をうつ飛行機の機銃掃射だったと聞き、この先どうなるのか毎日不安で一ぱいでした。また日本兵が四列になりシベリヤに連行されて行く姿が今でも目から離れません。毎日のようにソ連兵のドロボウ、一日中鉄ぼうのなりばなしでときどき日本人も殺害されました。

私の嫁入りタンスなどは逃げ場の踏台となり、毎夜モンペ姿で寝、長靴、衣類を用意しました。すぐにソ連将校の家族に部屋貸しを余儀なくされ同居生活、マダムがときどきヒステリーをおこし、真赤な顔でさげび、部屋中をたたくなど、さまざま事件が毎日おこり、とても書きつくせません。私は二十八歳で二人の子持ち、二十一年十二月中旬に極寒の中で引揚げのため部落を出まして真岡へと汽車の旅、夜九時頃につき、雪ですべりながら真岡女学校あとに大勢の人が船待ちをし、黒パンの配給、夜はとても寒く、二週間近く引揚船到着を待ちました。